

私は、八月のあたまという時期があまり好きではありません。暑いから、ということもあります。しかし、それよりも私は、原爆が投下された日というのがあまり好きではないのです。好きな人というのもあまりいないと思いますが、私は好きではないというより、とてつもなく怖くなるのです。

七十三年前の八月六日に広島、九日には長崎に原爆が投下されました。テレビでは記念式典が中継され、原爆の落ちた街の悲惨さを語り伝える被爆者の方々に関するニュースを放送していたり、記念のスペシャルドラマが放送されていたりしていました。ときどき、おぞましい絵や生々しい写真が出てきたりもします。テレビでたまたま点いていたから、なんとなく見ておいた方がいいかなと思ったから、という理由で私はそれらを見ていました。

そこで、私は毎年思うのです。

「もしも今この瞬間、私のすぐそばに原爆が落ちてきたら、私はどうなるのだろう」と。爆心のすぐそばなら熱さを感じる前に身体の水分が一瞬で蒸発してそれまでなのでしょうが、全身に火傷をし、焼け爛れ剥がれた皮膚を垂らし、生きているか死んでいるのかもわからない、人間“のようなもの”になって焼け野原を歩き回り、そのまま野垂れ死ぬのかもしれないと思うと、どんな怪談を聴いた後よりも怖くて怖くてたまらなくなります。今この瞬間、どこかの国の偉い人が話し合っているのかもしれない、0.1秒後、空がピカッと光るかもしれない。そんな想像が頭を支配してしまいます。想像が現実になってしまいそうな今の世界情勢が、余計にその想像にリアリティを持たせてきます。原爆のこと、戦争のこと、今の世界のこと、年を重ね、色々なことを知れば知るほど怖さは増し、頭から離れてくれなくなり、夜も眠れなくなってしまいます。その怖さからなんとか逃げようと私が取った策は、原爆とは全く関係のないドラマを見ることでした。それも、街を破壊する怪獣を正義のヒーローが倒すという、ひどく子供向けのお話です。戦いという点では全く関係がないとは言えませんが、このようなお話は、結末が決まっています。どんなにピンチが訪れようと、最終的にヒーローは必ず勝ちます。破壊された建物にいた人々は犠牲になったのかと思ったりもするのですが、なにより、ああ、こんなに単純な話だったらどんなにいいだろう、と思いました。

七十三年前の日本人が戦っていたのは、怪獣ではありません。自分たちと同じ人間です。私たちと同じように家族がいて、故郷があって、趣味があって、好きな景色があって。そんな人間が、同じ人間をあの原爆という兵器で殺したのです。部活などで話し合う度に、一つの事実に対していくつもの考え方があり、どちらかが正義でどちらかが悪だという単純な尺度では測れないのだと思い、訳がわからなくなってきました。当時のアメリカの兵士の方が何を思っていたのか、今の私はまだあまり良く知りません。それを知った未来の私は、さらに訳がわからなくなるのでしょうか。

でも、一つだけはっきりと思うことがあります。原爆が落とされたという事実や、その下で罪のない市民に起こっていたことから、ただ怖いからという理由で目を背けてはいけない、ということです。直接原爆や戦争を体験した方々がどんどん減っていくなか、私たちはその怖さを、悲惨さを、七十年以上経った今だからこそ知っていなければいけない。私が今、

目を背けてどうするのだ。そんな小さな使命感のような気持ちを抱きながら、私は八月のあたまを過ごしていました。